



# 2nd カタリバ

## 〈看とり〉と〈おくり〉

2018年 ①8.18日 ②8.27日 ③8.31日  
14~16時 鴨江アートセンター (浜松市)

### 各回のテーマ

- 1回目：看とり
- 2回目：おくり
- 3回目：供養

どうやって看とりたいか。看とられたいか。  
どうやっておくりたいか。おくられたいか。  
それぞれが「思いを語りあう場」をつくりました。

ずっと先のことのようにいて、目前の問題。  
他人事のようにいて、わが身の切実なこと。  
人の死は、やがて自分の死に。

死を見据えることは、  
いまの生を見据えることにつながります。  
とは言っても、むずかしすぎます。  
どうしたらいいのでしょうか。

そこでひとつの提案。  
「語り合う場」があるといいと思います。  
自分の体験を、思いを、  
疑問を、迷いを、希望を、計画を。

語り、耳を傾け、分かちあう。そういう場づくりを。  
互いに支えあえるネットワークができていけば、心強いです。  
そんな思いで、企画しました。

参加費 無料 定員 20名

予約 ☎ 080-5412-6370 池谷

問合せ ☎ 080-5412-6370 / 053-989-1112  
Mail : info@raksha.jp.net

会場 鴨江アートセンター

浜松市鴨江町1番地1  
浜松駅より徒歩15分。クルマの方は近隣の駐車場を。  
バス停：鴨江アートセンター  
浜松駅バスターミナル3番乗り場から約10分  
9番 鴨江・医療センター行き 9-22番 鴨江・教育センター・大平台行き

# 語ってみましょうか。 聞いてみましょうか。 それぞれの看とり死に方 おくりかたを。

**親**しいひとこの世に別れを告げようとするとき、私たちにできることは何でしょうか。悔いのない・納得のいく〈看とり〉とくおくり〉をしたいものです。

**も**っと心のこもったものに。もっと自然に。もっとゆったりと。もっとシンプルに。なにより逝く人が喜ぶようなものを。

**楽**舎は、今年の3月に講座（連続7回）を開きました。仏教、神道、キリスト教、ヒンドゥー教など、いろいろな宗教の実践者たちに語ってもらいました。

**参**加者の語りあいを通して、探求を深めていきました。「そんなふうに見とりができるんだ」「あんなおくり方があるんだ」「葬儀とは、そういう意味だったのか」……など。

## 〈ファシリテーター：池谷 啓〉

司会 & コーディネーター。NPO 法人楽舎 代表。著述業。仏教書、医学書の編集に携わる。仏教、宗教、インドに関してフィールドワークを行っている。母親の〈おくり〉を、自らがお経をよみ、おこなった体験がある。

## 〈NPO 法人 楽舎〉

楽舎は〈山里とまちなかをむすぶ〉、〈古き伝統といまをむすぶ〉などの事業を行っている。

過疎化の著しい天竜区春野町への定住促進をすすめている。耕作放棄地を蘇らせて完全無農薬の米づくりなどの農林業体験もすすめてきた。また、次のような企画を行っている。

神社と寺と市民をむすぶ「神社 寺カフェ」。「納得のいく看とりとおくり」の連続講座。「インドの智慧と文化を学ぶ集い」。

山里の暮らしを伝える「北遠山里めぐり」、伝統の祭や匠の手仕事の技を伝える「いにしえをつなぐアーティスト」などのトークイベント。

山里での暮らしを紹介する「こんなにアートフルな山里暮らし」、まちおこしの「昭和レトロの二俣めぐり」などを主催してきた。

静岡県浜松市天竜区春野町<sup>け</sup>気田 946-1  
☎ 053-989-1112 / 080-5412-6370

<http://raksha.jp.net/mitori-okuri/>

**死**は、他人事ではありませんよね。やがて自らが看とられ、おくられる日がやってきます。究極は、自らの死にかた、しまいかた。それをどうするか、ということになってきます。

**こ**れだという「答え」はありません。えらい人に教えてもらう。知識を得る。学問的に理解する。でも、腑に落ちなければ、意味がありません。それぞれが納得のいく答えをつかむしれないと思います。

**そ**のためにも、自由に思いを語る場があるといい。そうと思って、集いを企画しました。特に講師はいません。テーブルを囲み、お菓子をつまみながら、語りあうひとときです。

## 同時開催

## 臨床現場の僧侶が語る 「看とりとおくり」

### 8月26日①

14～16時 鴨江アートセンター  
参加費：無料／先着70名（予約不要）

講師：三浦紀夫

真宗大谷派僧侶／ビハーラ21事務局長  
上智大学グリーンケア研究所講師



看とりとおくりの実践を行っている。「看とりの現場のリアル」を語ってもらう。悲しみと孤独感で崩壊して

いく心に寄り添う。それがグリーンケアである。

話は具体的で実践的。利用者（高齢者、障がい者）と関わる時は、救急車に同乗する、看とりを行う、ご遺体を迎えにもいく。供養も行う。そういう覚悟でいる。

医療、介護、宗教、葬儀他諸々の関係者が連携してグリーンケアを学ぼうと訴える。大阪で活動している。